バリ島の伝統芸能にみる文化の継承

峯　　恭　子

はじめに

現在の我が国の音楽教育では、伝統音楽の指導の充実が求められています。その背景には、国際社会を生きる日本人として、自国の文化のよさに気付き、その価値や意義を理解することができる力を育てることが求められていることが挙げられます。また、自国の伝統文化のよさを理解することは、他国の文化を尊重する態度を養うことに繋がっていきます。小学校の学習指導要領では、「我が国や郷土の伝統音楽の指導の一層の充実」を目指して、わらべうたや日本古謡が取り扱われ、和楽器の取り扱いについても以前よりも早い段階からの指導が明記されています。さらに、中学校の学習指導要領でも、和楽器の表現活動に加えて言葉と音楽の関係や、姿勢や身体の使い方についても配慮するよう明記され、単に演奏ができるだけではなく、言葉や身体性といったより本質的な指導が求められていることがわかります。

一方で、現在の子どもたちは家庭や地域社会において我が国の伝統音楽にふれたり経験したりする機会が減ってきています。子どもたちに教える大人でさえも、伝統音楽に関する知識や技能を身につける機会が少ないのも事実でしょう。今回、2014 年 8 月 8 日から 8 月 10 日にバリ島で開催された環太平洋乳幼児教育学会に参加し、バリ島の様々な伝統芸能を視察することができました。学会での成果はまた別の機会に見ていただくことにして、ここではバリ島の伝統芸能がどのように受け継がれてきているのか、その様子をご紹介いたします。

1. 人々の暮らしと文化

バリ島では、絵画や彫刻、音楽など様々な文化が日常生活のなかに存在しています。なぜなら、それらすべての芸術が神様に捧げるもの、という考え方があるからだそうです。バリ島は、約 90% 以上がヒンドゥー教徒といわれており、バリの人々は毎日欠かさずに神様にお祈りを捧げています。例えば、街中を歩いていると、玄関先や道端に手の平サイズの椰子やバナナの葉で作られた箱に、色とりどりの花が盛り合わされたものを見ることができます。これは「チャナン」といって毎日決められた場所にお線香とともにお供えをしてお祈りを捧げるのだそうです。

この他にも、玄関先や寺院の神像や祭壇などに、白と黒の格子模様の布が巻かれているのをよく見かけます（田んぼのかかしにも巻かれていました)。この白と黒とは、善と悪、生と死、光と陰、のようにすべては相対する二極のものがバランスを取り合いながら共存している、というバリ・ヒンドゥー教の基本概念を象徴しているそうです。そして、白黒の格子模様のことを「ポレン」といい、バリでは魔除けとされています。このような布のことを「サポット・ポレン」といい、これを巻きつけることで悪を締め出すことを意味しているのです。このように、バリの人々の生活が宗教とは切り離せないように、芸術も日常生活のなかに当たり前のように存在しています。バリ島の伝統芸能として、ここでは 3 つのバリ舞踊を中心に紹介します。

2. 様々なバリ舞踊

バリ舞踊は、「ワリ」「ブバリ」「バリバリアン」の3つに区分されます。「ワリ」は、寺院で神様へ捧げるための儀式として奉納される神聖な舞台芸術です。一方、「ブバリ」は、儀式後の奉納芸として演じられたり、人前で観賞用として演じられることもあります。そして「バリバリアン」は、純粋に娯楽のために踊られる舞踊です。今回私が実際に鑑賞したものは、「ブバリ」のバロンダンス、「バリバリアン」のレゴンダンスとケチャダンスです。

(1) バロンダンス

バリでは、善と悪の両方が共存していると考えられていることは前述した通りですが、バロンダンスは、善の象徴である聖獣バロンと悪の象徴である魔女ランダの終わりなき戦いを描いたバリ舞踊の代表的な作品です。バロンとランダの永遠の戦いが、バリ・ヒンドゥー教のもつ生と死、善と悪といった相対する概念を表しています。

善を象徴する聖獣バロン

悪を象徴する魔女ランダ

バロンは、獅子舞のように前足と後ろ足の2人1組で踊っています。金色で飾られた姿はいかにも聖獣といった様子です。一方、ランダは長い舌と長い爪が特徴で、飛び跳ねるように踊ります。バロンダンスはもちろんダンスもありますが、全体の構成は劇のようになっており、物語の途中では猿もでてきます。

バロンとレゴンダンスのダンサー

レゴンダンスを披露する子どもたち

その他、物語の前半が終了すると、後ほど紹介する観賞用の女性舞踊であるレゴンダンスが途中で披露されます。このバロンダンスはガムランと呼ばれるバリの楽器が奏でる美しい伴奏と共に行われます。独特な音色をもつガムランですが、一定のパターンを反復して演奏するのが特徴です。そのため、バロンとランダが対立する場面では、ガムランの反復される伴奏も相まってより迫力のある雰囲気になります。

(2) レゴンダンス

バリの宮廷舞踊に端を発するレゴンダンスでは、ガムランの音楽に合わせて美しい衣装を身にまとった女性ダンサーが華麗に舞いながら、ヒンドゥーの叙情詩などの様々な物語を表現します。レゴンダンスの特徴として、目を大きく開き視線を様々に変化させることで表情や感情を表すことや、指先を小刻みに動かしながら踊ることが挙げられます。学会初日のレセプションパーティーでも舞台でレゴンダンスが披露されましたが、子どもの頃から長年練習しているからこそ、小刻みに動く指の動きが出来るそうです。また、学会発表のなかでは子どもたちもレゴンダンスを披露してくれました。小さい子どもでも、指先の1本1本まで気を配りながら踊っていました。私たちも実際に教えてもらいレゴンダンスを体験しましたが、写真のように身体は固定したまま腰を少し落として足を動かしたり、指だけ動かしたり、首だけ動かしたりするのは非常に難しく、子どもたちの踊りを見ながら見様見真似で踊るので精一杯でした。バリの子どもたちは、5歳から6歳くらいから親から、また学校やダンス教室などでダンスを習うため、基本の踊りは多くの子どもたちが出来るようです。

(3) ケチャダンス

ケチャダンスは、数10名から100名以上の男性達が円陣を組んで座り、楽器を用いずに声だけで物語を演じるのが特徴です。ケチャと聞くと、小学校や中学校の音楽の授業で習ったことを思い出す人も多いのではないでしょうか。バリ島の伝統音楽として習ったかと思いますが、ケチャはそもそも儀式で踊られていたものではありません。元々は、儀式舞踊のサンヒャンと呼ばれる非常に秘儀的な性格を有したものでしたが、1930年代にドイツ人画家のウォルター・シュピースによって、ラーマヤナ物語をベースに“声のガムラン”という形で観賞用の舞踊として発展したのが現在のケチャだといわれています。

さて、“チャチャチャ・・・”というかけ声が特徴のケチャですが、このケチャの合唱は、旋律のないリズムパートを口で唱えているものです。しかし、大勢の人が適当に唱えているわけではありません。強弱や音色を切り替えるリーダーの役割をもつ人、全体のリズムを保つ役割の人、メロディを歌う人など、様々な機能をもつ人と仕掛けがあり、揮者なしで非常に高度なリズムアンサンブルを行っています。実際に、誰かの合図で一斉に“チャチャチャ”と揃う瞬間がありますが、一糸乱れぬ様は本当に圧巻としか言いようがありません。また合唱を行う人々は、合唱を行いながら手や腕や身体を動かして物語の内容を表現したり盛り上げたりもしています。このような合唱に合わせて、円陣の中央ではバリ舞踊の踊りが次々と登場し、舞踊劇の様式で物語が進んでいきます。ちなみに、写真に見える男性達が腰に巻いている白と黒の格子模様の布は、前述した「サポット・ポレン」という布で、善と悪が拮抗していることを表しています。

ケチャの合唱

物語終盤のファイヤーダンス

3. ガムラン体験

装飾が施されたガンサ

「ガムラン」とはインドネシア各地の様々な打楽器合奏の総称で、インドネシア語の“ガムル(たたく)”が語源となっています。ガムランには様々な種類がありますが、今回はそのなかでも代表的な「ガンサ」を体験することができました(写真右)。ガンサは、簡単にいうと片手でたたく鉄琴です。青銅の鍵盤を木製のバチでたたいて音を出し演奏します。音域によって大きさが異なり、旋律を演奏するウガル、高音域のカンティラン、中音域のプマデ、低音域のジェゴガンなどがあります。先ほど鉄琴のような楽器と表現しましたが、演奏方法には違いがあります。ガンサを演奏する際には、右手でもったバチで次の音を鳴らすのと同時に、直前に叩いた鍵盤を左手ではさみ響きが混ざり合わないようにします。また、ガムラン音楽の特徴として、一定のパターンを何度も反復することが特徴として挙げられます。私たちが体験したガンサでも、いくつかの音型を反復するなかで、強弱やテンポの変化をつけたり、次の部分へ進む際にはその音型を少しだけ変化させて（音を 1 つ足したり、リズムを変化させる）演奏を行いました。最終的には、ガムランを教えてくださった先生が演奏する旋律に合わせて伴奏を演奏することができました。ガムラン体験を通して、ガムランという音楽の魅力は音によるコミュニケーションにあると感じました。ガムランには基本的に楽譜がありませんし指揮者もいません。しかし、曲の始まりや終わり、また強弱やテンポはある楽器からの合図が基本となります。今回はガンサだけの体験でしたが、メロディの音と音の間やテンポの変化を感じ取り伴奏をつける経験を通して、本来は様々な楽器が行う音と音のメッセージのやり取りを垣間見ることができたように思います。バロンダンスやレゴンダンスはガムランの伴奏に合わせて行われますが、踊り手の合図によっても音楽が変化をしていくのもガムランの面白さといえるでしょう。

おわりに

バリ島の伝統芸能の視察を通して、人々の生活のなかに当たり前のように音楽や踊りが根付いていることを実感することができました。しかし、現地の人々に話を聞くと、子どもの頃からガムランや踊りを習うことが当たり前な一方で、若い世代の生活に変化が起きていることも危惧されていることがわかりました。伝統や文化を継承するのは主に10代から20代の若者ですが、社会の変化とともに、大学進学率の向上やテレビやゲームなどの様々な電子機器の普及によって、伝統芸能の伝承にも問題が起きているのです。また、バリ島では伝統芸能を単なる観光産業にしないための活動も行われています。しかし、私が視察したなかにはエンターテイメント性を重視したような演出が少なからずあったことも事実です。我が国と比較すると、宗教的な側面からもバリ島の人々と伝統的な音楽や芸能は非常に密接に関わり合っているような印象を受けますが、その継承という側面においては、どのようにそれらを残していくのか、また新しい文化を創り出していく必要があるのか、国際化していく社会のなかで必死に模索しているようにも感じました。

我が国の伝統音楽には、雅楽や能、狂言、歌舞伎、文楽など様々な分野のものが存在します。しかし、私たちはまずどれだけそれらの音楽やそこで使用される楽器を知っているのでしょうか。そして、その価値や意義をどれだけ理解しようとしているのでしょうか。国際化といわれる今だからこそ、我が国独自の文化を再認識することだけでなく、子どもたちに伝えていくためにはどのようなアプローチができるのか、そしてどのようにこれらの伝統音楽を継承していくべきなのか、教育に携わる私たちは常に考えていく必要があると思っています。

最後になりましたが、バリ島への渡航に関してご支援・ご協力くださったすべての方々に感謝の意を表します。